

サンシヨウウオ

その日は朝から大雨が降っていた。広がる曇天の空にいつもなら少し気分が下がるのだが、今日だけはほっとした。

昨日の天気予報通りの今日の気候は、彼女にとって来やすいものであろう。つまり、やっと予約を延期せずに済んだのだ。

予約時間の丁度十分前、店の戸に着いた鈴を鳴らし、彼女が入ってきた。

「こんにちはー、少し早く着き過ぎちゃったかしら」

「いらっしやいませ、鳴海さん。全然大丈夫ですよ、それより来られてよかったです」
「ほーんと。この間みたいに快晴で予約延期になったら、いよいよ間に合わないところだわ」

鳴海さんはそう言って笑うと着ていた「水中スーツ」についた雨粒を払った。
「それにしてもすごい雨でしたね……、」
「鰭用歩行器」、逆に壊れませんか？」

「大丈夫よ、しっかり防水の仕組みになっているから。万が一何かあっても、海座頭さ

んに連絡したら、車で迎えに来てくれるらしいし」

「それはよかった」

私は戸棚からペットボトルを取り出すと、いつもの様に鳴海さんに渡した。彼女はお礼を言いつて受け取り、水中スーツの吸水口をあけて、ペットボトルの中身を流し込む。

「あら、これいい海水ねえ、どこの？」

「地中海のだそうです。他の「人魚」のお客様に出したときにも評判がよかったので、ストックしてあります」

「そうなのね。確かに私たちはそこら辺の海水を浴びることが少ないし、新鮮でいいわ」

嬉しそうに吸水口を閉めた鳴海さんは、僕のすすめに従って椅子に座った。

「それじゃ、今日は今度の歌の会用に、髪を整えるってことでしたよね」

「そうそう。もう海の中でバサバサ広がって嫌になっちゃうのよ」

早速彼女のうねりのある髪をコームでとかすと、彼女が鏡の中でぼやいた。

「歌うときに髪が口に入ると嫌なんだけど、やっぱり歌いながら髪をなびかせるのって絵になるのよねえ」

「確かに」

「だからあんまりバツサリ切ると困るんだけど、ほどほどに長さ保ちつつ広がりない感じをお願いしたいわ」

「かしこまりました。ストッパーはどうします？」

「『水中ストッパー』ねえ、水の中でもしつかりまつすぐで好きだったんだけど、歌うなら少しうねりがあるくらいの方が映える気がして」

「そうですね、じゃあこのままで」

シャンプー台の方に彼女を誘導すると、タオルを首元に巻き、椅子の傾きに合わせ、横たわらせた。

水道を『海水モード』にし、人魚用のシャンプーとトリートメントを用意したところで、彼女のシャンプーを始める。真水よりべたつきがある海水を彼女の髪に揉み込んでいくと、彼女は気持ちよさそうに息をついた。

「相変わらず上手ねえ」

「ありがとうございます」

「いつも歌の会の時、ここで髪型をやってもらっているけれど、本当に評判いいのよ。いっつもお客様に褒めてもらおうわ。この間なんか、ヒトデの奥様にうらやましがられて大変だったんだから」

「それはよかった」

自分の技術によって輝くお客様の評判を聞けるのはとても気分がいい。

「私も、鳴海さんの歌の会、行ってみたいんですけどねえ」

「あ、そうそう、それなんだけどねー」

鳴海さんは思い出したように、閉じていた目を開いた。

「今度から、『海中歌会』を陸にもzoom

中継することになったのよ！」

「え、本当ですか？」

「昨今陸の方も私たちの歌を聴きたいって言うてくたさる方が多くてね、運営がやっとなんか重い尾ひれをばたつかせてるの！後でオンラインチケット渡すわね、私からのプレゼント」

「よろしいんですか？」

「もちろん、あなたにはいつもお世話になっているから」

楽しそうに微笑んだ彼女の笑顔と、彼女の歌をやっと耳にできるうれしさに、私も自然と笑みをこぼす。

「ありがとうございます、ありがたく参加させていただきますね」

「ふふ、よかったわあ」

シャンプーを終え、タオルドライもそこそこにカット台の方に戻ると、濡れた髪をコームでそろえつつはさみを持った。

「それにしても、すごいですね、陸に中継なんて。海中でしか聞けないはずの、海中歌会を聞けるのは、私たちには思ってもみないほど僥倖ですけど」

シャキン、と音を立てて、髪にはさみを入れていく。「……そうねえ」

その時、鳴海さんの顔がわずかに曇った。

「今回のはね……、陸の方達だけの要望って言うよりも、『上陸組』の要望が強いんだよ」

「上陸組って言うと、元海の生物の方達で

すよね？「陸適用手術」を受けた」

「ええ」

鳴海さんは寂しそうに笑ってうなずいた。

人魚や海坊主など、海の者達が陸を目指して移住し始めたのはもう半世紀も前だ。はじめはどうか水中を陸でも再現する様な装置や衣服が作られ、彼らはそれらを用いて陸で生活し始めた。鳴海さんが着ている水中スーツもその一つだ。しかし、常に水を持ち歩き、交換しなければならぬ生活は不便で、彼らは新たな陸生活への方法を開発した。それが陸適用手術である。

陸適用手術は、生物の種類によっても異なるが、その多くが完全に陸の生物の仕組みに身体を変え、水中での生活から切り離すものだった。その技術の発達により、陸と海との関係性は大きく変わったのだ。

今では「上陸組」と呼ばれる彼らは、すっかり陸に溶け込んでいる。海に近いこの地域では、十人に一人は上陸組なんて統計もあるそうだ。

「水中での暮らしに懐かしさを感じて、海

中歌会の陸中継を提案したんですって」

「なるほど」

鳴海さんは皮肉っぽくそう言った。

「海の中を捨てたのは自分たちのくせにね……。ここ十年で、海の人口もずいぶん減ってしまったわ。私の友人も多くが陸に上がった」

「よく聞きます。上陸組も、更に全国へ散らばるようになったと」

「悪いことではないんでしょう。海の中は不便なことが多いし……。それでも、海の中でもきれいなものや素敵なものとはたくさんあるのにね」

鳴海さんは目を閉じると、ため息をついた。

「そういう私もこんなものを着て、わざわざ陸に上がって髪を切りに来てるんだから……。人のこと言えないか」

「難しいですね」

「ほんと」

「たいした意見も言えない私の相づちに、鳴海さんは笑って同意してくれる。彼女は本当に気持ちがいよ海風を運ぶ女

性だった。

「まあ、だからこそ今回の機会を利用すべきよね」

「というと？」

「オンラインチケットの価格、めっちゃ高価にして、陸の奴らから金を巻き上げてやるのよ！」

鳴海さんは、高らかにそう宣言した。

「そしてその資金を海の発展にまわすの。でっかいショッピングモールやらなんやらガンガン建ててやれば、少しは海の魅力にも気づくでしょ！入り込める水族館のものもいいかもね」

「……なるほど、すごいですね。確かに、鳴海さんがやれば海の中に陸の生物を引き込めそうですね」

「あら、当然よ」

商魂が垣間見える鳴海さんに圧倒されていると、鳴海さんは鏡の中で不敵に笑った。

「人魚は昔からこの歌声で、人間を海に引きずり込んできたんだもの」